

# 地方霊場の開創とその巡拝路について

田 上 善 夫

(2003年10月20日受理)

Establishment of the local sacred place and its pilgrimage way in Japan

Yoshio TAGAMI

E-mail : tagami@edu.toyama-u.ac.jp

## Abstract

In this paper, the local sacred places in Hokuriku, southern Tohoku, and southern Kanto were investigated mainly from the viewpoint of pilgrimage ways. In many sacred places, the sacred point has moved around since the time of establishment, and therefore, its pilgrimage way can not be specified. Cluster analysis was used for those sacred places to set up the pilgrimage order, and the pilgrimage way was reconstructed using GIS. Furthermore, the change of the meaning of a pilgrimage way was considered with regard to the sacred places established in recent years. The main results obtained then are as follows. 1) In Hokuriku, many Kannon sacred places etc. were established mainly on Echizen in the late Edo period. And the starting points are distant from the end points in many of their pilgrimage ways. 2) On the southern Tohoku, many sacred places were established in the farm villages and the cities after the Age of Civil Wars. The influence of asceticism was strong and the sacred places of various kinds overlap. 3) Many urban sacred places were established in Tokyo, and there was a tendency to pilgrimage to a group of some sacred points. On the other hand, the pilgrimages to everywhere in an area was taken in the Tokyo suburbs. 4) Suitable pilgrimage ways were set up using a map software etc. However, the software is for going by car, and they are often unnatural as pilgrimage ways. 5) The sacred point group which exists in a sacred place was extracted by cluster analysis. Furthermore, by combining a neighboring sacred point, a suitable pilgrimage order will be known. 6) A pilgrimage way was reconstructed with the shortest path that avoided the rise and fall considering the angle of inclination. They are considered to resemble the ways made spontaneously. 7) A pilgrimage is one of the annual events having been performed in the shrines, etc. from ancient times. The form of pilgrimage around sacred points came to spread gradually. 8) A pilgrimage is performed individually or by a local group. In the former, pilgrims visit the sacred point group occasionally, and in the latter, a pilgrim group visits everywhere in the area. 9) In the recent pilgrimages, sightseeing and friendships are important besides faith and a mass for the dead. Furthermore, health, culture, etc. are also important. 10) In the aging society, a sacred place connected with temporal benefits is called for. To establish one, the influence from related contractors is large.

キーワード：寺院 霊場 巡礼 北陸 江戸

Key words : Temple, Sacred place, Pilgrimage, Hokuriku, Edo

## I はじめに

中世以降、全国各地に西国霊場のような観音霊場が開創された。近世以降には、四国霊場のような大師霊場が、西日本を中心に展開した。霊場には観音、大師のほかにもさまざまな本尊をまつ

ものがあり、現代では不動霊場、十三仏霊場、薬師霊場、地藏霊場など多くの霊場がある(田上善夫, 2003a)。霊場は、地域内のものから各地方におよぶ規模のものがある。また各種の霊場地域には地形的にも特色がみられ、東北地方では盆地が一つの地域単位となる一方、瀬戸内地方では島や半島

を地域単位として霊場が開創されている。さらに都市内部にも霊場が開創された(田上善夫, 2003b)。

こうした霊場の寺院には、三十三番や八十八番など巡拝の順序を示す札所番号がふられており、この順にしたがって霊場寺院が案内されている。ただし札所番号の配置は、霊場によりさまざまである。たとえば福岡県の篠栗霊場では、修験の行場に由来する札所所有者の意向で四国の札所を写し、後世の廃寺や異動も数多いために、配置は不規則である。また千葉県印西霊場でも、手賀沼と印旛沼間の丘陵縁辺部の札所は、番号の配置は不規則で、これらを一巡する行程とは異なる。また東京の御府内霊場では、武蔵野台地から荒川低地にかけての札所を、近年は番号によらずエリアごとの巡拝が案内されている。

一般に霊場の寺院配置は周回状であり、キリスト教での「聖地巡礼」がたとえばサンチャゴ・デ・コンポステーラに向かうように直線状であるのとは対照的である。このことは地方霊場の性質に起因するものと考えられる。ただし上述のように、霊場の巡拝は札所番号順とは限らないが、巡拝路が案内されないことが多い。また地域内に各種霊場が重層し、寺院のネットワークがオーバーラップしており、さまざまな霊場の把握を困難にしている。巡拝路は霊場の構成要素であり、その理解には巡礼者の実際の巡拝順序、さらに巡拝路の実態の把握が必要である。

本論では、巡拝路からみた霊場の特色について、さまざまな地方霊場が多数開創されている越前など北陸、最上など南東北、江戸府内など南関東のありようを例にして、明らかにする。それには、1)これらの地域における、さまざまな規模および種類の地方霊場を踏査して、現在における巡拝路の実態を明らかにする。2)全国霊場巡拝事典(大宝輪閣編, 1997)、日本祭礼地図(田原 久編, 1980)などを資料とし、札所の経緯度座標、本尊、宗派、開創などの項目を含めたデータベースを作成する。これより巡拝路について、カーナビゲーションによるルート探索、クラスター分析の援用による巡拝順序の設定、GISによる傾斜を考慮した最短パスとして近世の巡拝路の復元、を試みる。3)上記により巡拝路が明らかとなるが、その形態の特徴

について、各霊場を巡拝する人々の特色から比較検討する。また新たに開創された霊場について、現代における巡拝路の性格やその設定の背景について検討を加えることとしたい。

## II 地方霊場とその巡拝路の特色

### 1. 北陸・東北部の霊場

#### 八乙女山の三十三観音

富山県東砺波郡井波町の八乙女山(756m)では、その北西斜面の山道に沿って、三十三観音が安置される(図1)。「八乙女」には巫女の意味があり、古来修験ともかかわりの深い地域である。いずれの観音像も、昭和56(1981)年に安置された(図2)。

富山県西部ではほかにも、殿様道、中筋往来、俱利伽羅峠などの街道に沿って、三十三観音が安置されてきた。この中で俱利伽羅峠三十三観音の札所番号の配置は不規則であるが、安置された当初は規則的であったと考えられる。付近にはさらに近世に開創された一国霊場など、さまざまな種類や規模の霊場がみられる。

#### 福井市三十三番霊場

街道などに沿う三十三観音は、河岸や山中など人里離れた位置にも安置されるのに対して、町中の寺院を巡っても三十三観音が安置された。福井市周辺にも福井市三十三番霊場や、慈母観音三十三札所などがある(図3)。福井市内には近世末より多くの霊場が集中している。また敦賀付近にも、六十六ヶ所の新四国巡礼地があった(山田雄造, 1996)。

#### 越前三十三番札所霊場

福井では都市部だけでなく、一国におよぶ霊場も多数みられる。越前三十三番札所霊場は、延宝年間(1673-81)頃に成立したもので、北陸における地方霊場の嚆矢の一つと思われる。嶺北には、越之国三十三観音霊場などもあり(図4)、北陸でも霊場の密度がとくに高い。これには福井の西国霊場に近い位置や、嶺北の盆地状地形などがかわると考えられる。若狭霊場(富永博次, 1982; 榎原雅治, 1996)では、巡拝路は環状ではなく海岸に沿って延びている。

#### 佐渡四国八十八ヶ所

北陸地方でも、観音霊場が多く大師霊場は少な

い。ただし一国規模の大師霊場はみられ、佐渡にも佐渡四国八十八ヶ所がある(図5)。同霊場は文化十二(1815)年に、第6番蓮華峯寺(図6)の僧らが、四国霊場の砂を島内の八十八ヶ所に奉納したのが始まりとされている(大路直哉, 2001)。その巡拝路は島を周回するように続いている。

## 2 東北南部の霊場

### 岩部山三十三観音

前述の八乙女山三十三観音のような小規模霊場が、山形県にもみられる。山形盆地と米沢盆地を結ぶ奥羽本線中川駅北側の、南陽市川樋の岩部山(506m)に、三十三観音がある。岩部山は凝灰岩質でできており、石切場があった。岩部山南側斜面を巡って、三十三体の観音像が岩肌に浮き彫りにされている(図7)。

岩部山の南方にも類似の石仏がある。東置賜郡高畠町の竹森山(281.5m)にも、麓から頂上までの道沿いに三十三観音が立つ(奥村幸雄, 1997)。付近の天台宗東光寺は修験系寺院である。米沢盆地を中心にした最上川流域に、明治29年に開創された置賜新四国霊場の第79番にあたる。南陽市二色根の同第88番薬師寺も、小山(341.2m)の南斜面にあり、赤湯の町を見おろす位置にある。

さらに、米沢盆地から板谷峠を東に越えた福島盆地中央の信夫山(287.6m)にも、よく似た観音がある。信夫山の東向き斜面に、95体の観音像や供養仏が彫られ、岩谷観音とよばれている。仏像の大半は江戸時代中期という(2003.1.18朝日新聞)。信夫山には羽黒山神社も鎮座する。

### 山形三十三観音

山形市内にも、小規模な山形三十三観音霊場がある(図8)。奥羽本線西側にある第7番正徳寺は、この霊場の南西端にあたり、山形・村山四十八地藏第19番、山形百八地藏第13番の札所でもある。そこから500mほど離れた第8番<sup>じょうしょうじ</sup>静松寺は、境内には最上三十三観音の写しなどがまつられ、神社も隣接している。第7番と第8番間の上町勢至堂は、山形十三仏の第9番札所で、境内には湯殿山、庚申塔、大黒天、蔵王山、十八夜、天照皇太神宮、地藏、五輪塔などがまつられ、この付近一帯に修験の影響がうかがわれる。

奥羽本線の東側には第6番宝光院があり、同所

は山形・村山四十八地藏第18番、山形百八地藏尊第26番霊場でもある。六<sup>むつぐぬぎ</sup>榎八幡宮に隣接して、第5番報恩寺が続く。これらの寺院ではいずれも本堂とは別に、山門を入れて左側に観音堂が建てられている。

第1番六<sup>むつぐぬぎ</sup>榎山宗福院は、天台修験道山形法流の寺院で、計7霊場の札所を兼ねる(表1)。付近には第2番蔵龍院、第4番勇大庵、第3番勝因寺が続く。第17番誓願寺境内には牛頭観音を中にして左に馬頭観世音、右に豚観世音、脇に鳥の石碑がまつられる。真言宗智山派の寺院で湯殿山の石碑があり、山形百八地藏第24番、新四国最上八十八ヶ所第13番札所でもある。第9番般若院がある。

表1 霊場を兼ねる寺院

六 <sup>むつぐぬぎ</sup> 榎山宗福院	鈴立山若松寺
山形三十三観音第1番	最上霊場第1番
最上霊場第8番	東通り西国札所第1番
山形十三仏第1番	東通り札所第33番
最上新西国第1番	北国八十八札所第38番
新八十八所第12番	出羽十三仏所観世音
川東第19番	新四国八十八札所第1番
東向第7番	百八不動尊霊場第70番

このように山形三十三観音の札所には、他の霊場札所を兼ねる寺院が多く見られる。実際山形盆地周辺には、多数の霊場がある(表2)。観音、大師、地藏のほか十三仏、七福神などの霊場が各都市を中心にして開創されている(図9)。また修験の影響も明瞭である。たとえば置賜三十三観音は、享保七(1722)年の札所制定当時、別当に修験系の寺院が多かったという。また規模は小さく、別当寺院をもたず観音堂が単独で立っているもの、あっても遠く離れているものが割合多かったという。

### 最上三十三観音霊場

山形周辺で開創が最も古いのは、最上霊場である(図10)。最上霊場第1番は天童市の鈴立山若松寺である。若松寺は山形盆地に突出した山地の谷を2kmほど東に遡った山中にある。境内から奥の院に登る周回状の道筋に、三十三観音の石祠が置かれ、奥の院の周囲には池がめぐらされる。付近の最高地点(388m)に至る道がある。若松寺は計7霊場の札所を兼ねている(表1)。

第2番山寺千手院は、山形市・天童市境の立谷川の谷中にあり、その前を仙山線が通る。0.7kmほど下流側の山寺<sup>りっしやうじ</sup>立石寺は天台宗で日枝神社がな

らび、山門から急斜面にせみ塚、弥陀堂、仁王門、奥の院へ800余の石段が続く。立石寺と千手院間の凝灰岩の斜面上方には、垂水霊境、城岩七岩、修験場などの修行の場が連なる。千手院の現在の本堂は山麓にあるが、本来は滝のそばの垂水観音の位置にあった。

表2 山形県の主要霊場

霊場	開創	出典
最上四十八地蔵	享保十二(1727)	小形利吉, 1989
上山四十八地蔵	文化十四(1817)	小形利吉, 1989
新庄地蔵二十四箇所地蔵	文化十一(1814)	沼沢 明, 1988
山形・村山四十八地蔵	江戸末～明治初	高橋由子, 1995
山形百八地蔵		宗教グラフィック情報編, 1992
出羽路十三佛		出羽路十三仏霊場会, 1992
山形十三仏	平成4(1992)	大路直哉, 2001
山形七福神		佐藤清敏, 1984
七所明神		伊藤妙子, 2001
出羽七福神八霊場	昭和60(1985)	大路直哉, 2001
東根七観音	昭和2(1927)	東根七観音霊場会, 1992
上山七福神		寺尾 満, 1998
最上新西国三十三観音	大永六(1526)	渡辺信三, 2000
新庄地蔵三十三観音	文化十一(1814)	沼沢 明, 1978
山形三十三観音		佐藤清敏, 1983
上山三十三観音	享保十八(1733)	寺尾 満, 1998
長岡三十三観音	? 昭和58(1983)	阿部西喜夫, 1983
東通三十三観音	明治27(1894)	東根七観音霊場会, 1992
庄内百観音霊場		田原 久編, 1980
山形川西三十三番		田原 久編, 1980
鶴岡三十三観音		
新西国最上八十八ヶ所	明治19(1886)	沼沢 明, 1978
北国八十八ヶ所	昭和62(1987)	佛教文化通信編集部, 1987
置賜新西国八十八ヶ所	明治29(1896)	奥村幸雄, 1997
置賜三十三観音	享保七(1722)	奥村幸雄, 1997
小国三十三観音	明治13(1880)	奥村幸雄, 1997

第5番唐松山護国寺は、山形市から馬見ヶ崎川を遡る東沢にある。この谷は現在山形自動車道が通る。馬見ヶ崎川と滑川の合流する付近の、南向き急崖の懸造りの堂宇前、岩窟に唐松観音が安置される。また山神、水神などもまつられる。

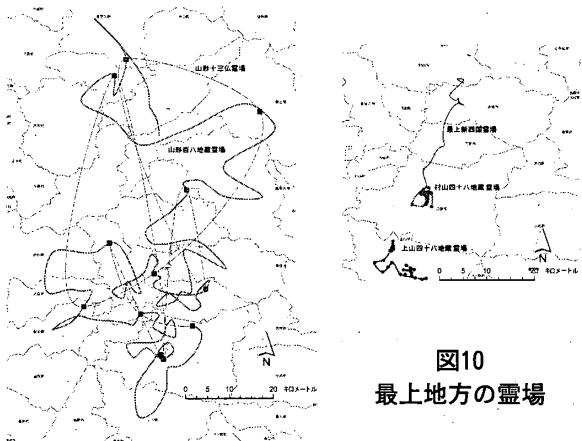


図10 最上地方の霊場

### 3 江戸・東京と近郊の霊場

#### 江戸三十三所観音霊場

東京とその近郊には、近世以降観音をはじめ大師、阿弥陀、七福神、地蔵などの霊場が開創されてきた(表3)。江戸時代中期には、江戸市内を中心にとくに観音霊場が開創され、江戸の近郊にも観音霊場が広がった(図11)。

中でも江都三十三所観音は、寛文八(1668)年の開創と推定され、最も古い。33寺のうち19寺が廃

寺となったが、昭和51(1976)年に昭和撰撰江戸三十三所として再興された(塚田芳雄, 1989)。

この江戸三十三所観音札所の第1番は、台東区浅草の浅草寺で、当初より存続している。坂東三十

表3 江戸・東京の主要霊場 塚田芳雄(1989)より集成

霊場	種類	地域	年代
江都三十三所(古来の札所)	観音	都心	江戸前
江戸三十三所(坂東の写)	観音	都心	江戸中
山の手三十三所	観音	都心	江戸中
近世江戸三十三所	観音	都心	江戸中
西方三十三所	観音	都心	江戸中
江戸三十三所	観音	都心	江戸中
江戸西国三十三所(上野王子駒込辺)	観音	都心	江戸中
江戸東方三十三所	観音	都心	江戸中
葛西三十三所	観音	都心	江戸中
玉川西組三十三所(玉川北百番西国)	観音	都内	江戸後
玉川東組三十三所(玉川北百番坂東)	観音	都内	江戸後
玉川北組三十三所(玉川北百番秩父)	観音	都内	江戸後
八王子三十三所(八王子市)	観音	多摩	江戸中
秋川三十三所	観音	多摩	江戸後
武相三十三所(東京・神奈川)	観音	多摩	江戸中
狭山三十三所(埼玉・東京)	観音	埼玉	江戸後
武蔵三十三所(埼玉・東京)	観音	埼玉	江戸中
稲毛領三十三所(川崎市)	観音	神奈川	江戸中
武州金沢三十三所(横浜市)	観音	神奈川	江戸中
小机領三十三所(横浜市)	観音	神奈川	江戸中
行徳三十三所(市川市・浦安市)	観音	千葉	江戸中
秩父写山の手三十三所	観音	都心	江戸後
坂東写東都三十三所	観音	都心	江戸後
東方三十三所(新坂東)	観音	都心	江戸後
東都北部三十三所	観音	都心	江戸後
北豊島三十三所	観音	都内	江戸後
東海三十三所(東京・神奈川)	観音	都内	江戸後
東京三十三所	観音	都心	江戸後
東三十三所(東京・千葉)	観音	都内	江戸後
京王三十三所	観音	多摩	江戸後
多摩川三十三所(東京・川崎)	観音	多摩	江戸後
小田急武相三十三所(東京・神奈川)	観音	神奈川	江戸後
武蔵野三十三所(東京・埼玉)	観音	埼玉	江戸後
昭和撰撰江戸三十三所	観音	都心	江戸後
御府内八十八所	大師	都心	江戸中
荒川辺八十八所	大師	都内	江戸後
多摩川四郎八十八所(坂東東京神奈川)	大師	都内	江戸中
武玉八十八所(東京・埼玉)	大師	多摩	江戸後
四ヶ領八十八所(東京・埼玉)	大師	都内	江戸後
南葛八十八所	大師	都内	江戸後
吉橋八十八所	大師	千葉	江戸後
多摩印八十八所	大師	千葉	江戸後
千葉寺八十八所	大師	千葉	江戸後
武蔵国八十八所(三郡送り大師)	大師	埼玉	江戸後
相模国八十八所	大師	神奈川	江戸後
玉川八十八所(東京・横浜・川崎)	大師	都内	江戸後
豊島八十八所	大師	都内	江戸後
南葛八十八所(5日)	大師	都内	江戸後
荒綾八十八所	大師	都内	江戸後
奥多摩八十八所	大師	多摩	江戸後
多摩八十八所	大師	多摩	江戸後
江戸川八十八所	大師	千葉	江戸後
江戸六阿弥陀	阿弥陀	都内	江戸前
西方六阿弥陀	阿弥陀	都心	江戸中
山の手六阿弥陀	阿弥陀	都心	江戸後
玉川六阿弥陀(東京・川崎)	阿弥陀	都内	江戸後
足立区六阿弥陀(足立区)	阿弥陀	都内	江戸後
総州六阿弥陀(茨城県・千葉県)	阿弥陀	千葉	江戸後
谷中七福神	七福神	都心	江戸後
隅田川七福神	七福神	都心	江戸後
山の手七福神	七福神	都心	江戸後
浅草七福神	七福神	都心	江戸後
下谷七福神	七福神	都心	江戸後
日本橋七福神	七福神	都心	江戸後
深川七福神	七福神	都心	江戸後
亀戸七福神	七福神	都心	江戸後
品川七福神	七福神	都心	江戸後
港七福神	七福神	都心	江戸後
山の手七福神	七福神	都心	江戸後
柴又七福神	七福神	都心	江戸後
江戸川ライン七福神	七福神	都内	江戸後
板橋七福神	七福神	都内	江戸後
青山七福神	七福神	都心	江戸後
池上七福神	七福神	都内	江戸後
銀座七福神	七福神	都心	江戸後
八王子七福神	七福神	多摩	江戸後
青梅七福神	七福神	多摩	江戸後
羽田七福神	七福神	都内	江戸後
御府内七福神方角詣	七福神	都心	江戸後
江戸最初六地蔵	地蔵	都心	江戸中
江戸六地蔵	地蔵	都心	江戸中
享保六地蔵	地蔵	都心	江戸中
豊島六地蔵	地蔵	都内	江戸中
江戸南方四十八所地蔵尊	地蔵	都心	江戸後
江戸山の手四十八所地蔵尊	地蔵	都心	江戸後
江戸東方四十八所地蔵尊	地蔵	都心	江戸後
江戸山の手二十八所地蔵尊	地蔵	都心	江戸後

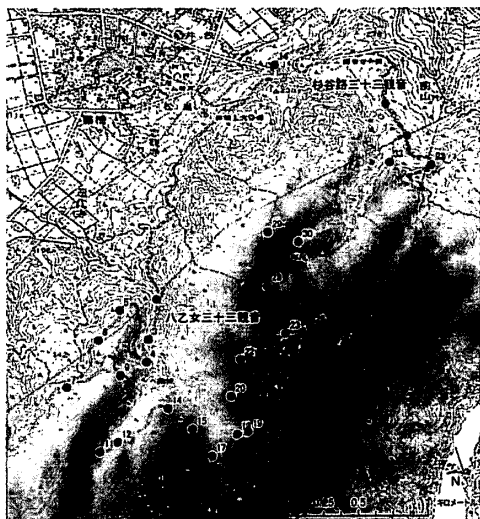


図1 八乙女山の三十三観音

富山県東砺波郡井波町にあり、山麓は井波風とよばれる局地的な強風が吹走する地域である。八乙女山稜線上には強風が吹き出すといわれる風穴がある。



図2 八乙女山の第20番観音

第20番善峯寺の観音像は、砺波平野の散村を見下ろす位置に、昭和56(1981)年に安置された。



図3 福井市の霊場

福井市内の霊場はすでに、文化十二(1815)年成立の「越前国名蹟考」に、六十六所観世音順礼として掲載されている。福井市内にはほかにも、坂東三十三所、26寺院の祖師廻り、福井八十八ヶ所弘法大師参りなどがある(杉原丈夫編, 1980)

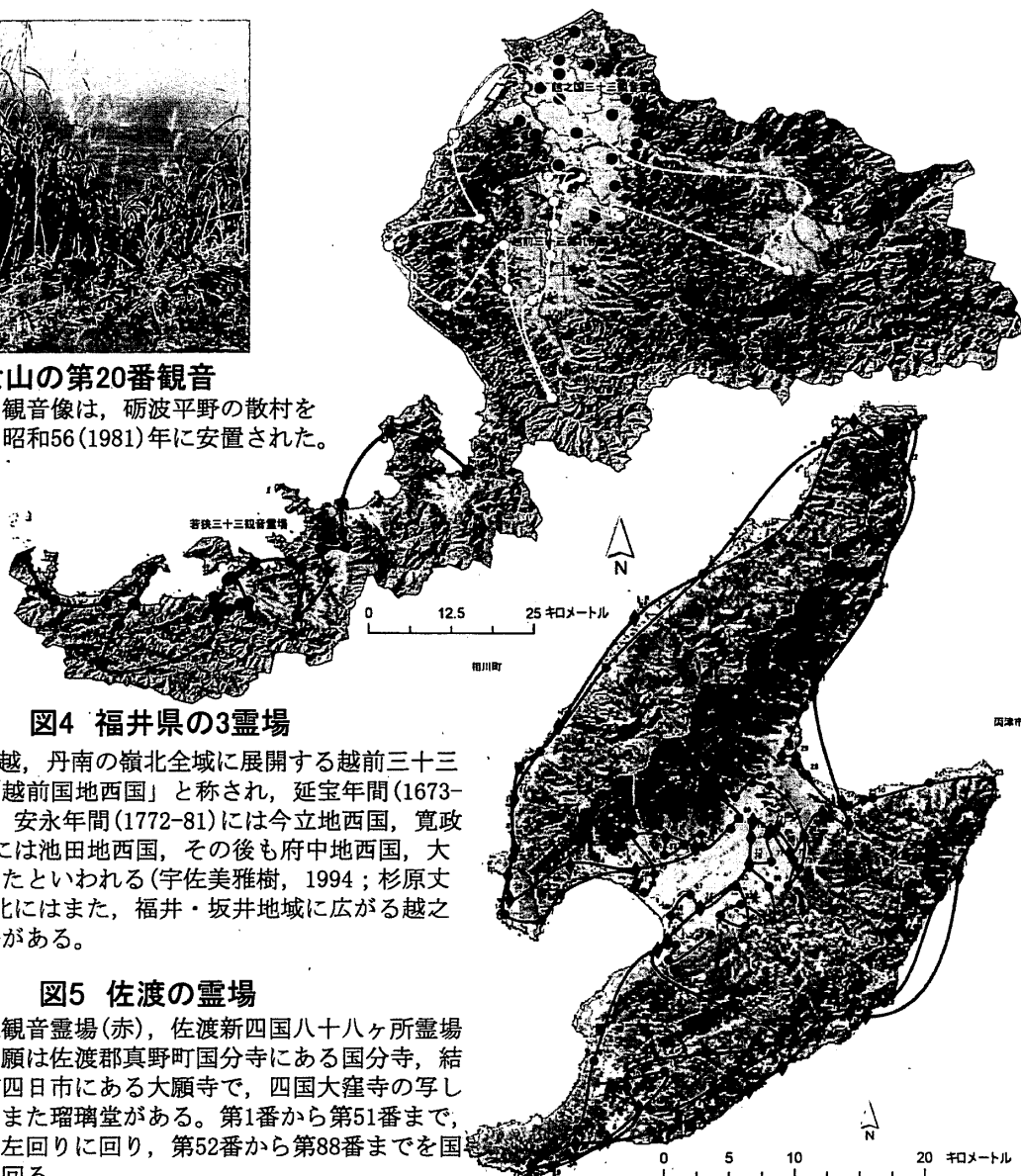


図4 福井県の3霊場

坂井、福井、奥越、丹南の嶺北全域に展開する越前三十三番札所霊場は、「越前国地西国」と称され、延宝年間(1673-81)頃に成立した。安永年間(1772-81)には今立地西国、寛政年間(1789-1801)には池田地西国、その後も府中地西国、大野地西国が成立したといわれる(宇佐美雅樹, 1994; 杉原丈夫編, 1980)。嶺北にはまた、福井・坂井地域に広がる越之國三十三観音霊場がある。

図5 佐渡の霊場

佐渡西国三十三観音霊場(赤)、佐渡新四国八十八ヶ所霊場(青)。新四国の発願は佐渡郡真野町国分寺にある国分寺、結願は佐渡郡真野町四日市にある大願寺で、四国大窪寺の写しとされ、境内にはまた瑠璃堂がある。第1番から第51番まで、島の外周に沿って左回りに回り、第52番から第88番までを国中平野を右回りに回る。



図6 佐渡八十八ヶ所霊場  
第6番蓮華峰寺金堂

小比叡とよばれ佐渡郡小木町小比叡にある。谷の斜面を下る位置にある境内には、重要文化財の金堂、弘法堂、骨堂、小比叡神社ほか、多数の堂宇がある。

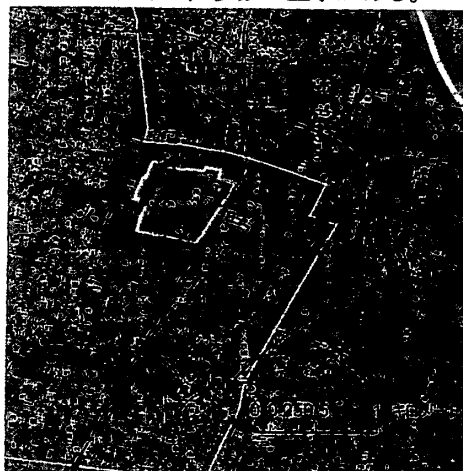


図8 山形三十三観音霊場

山形城、現在の霞城公園は、蔵王山から西流する馬見ヶ崎川が作る扇状地上に位置する。城を取り囲んで武家地、その外側に町人地があり、さらに外側に寺社地が配されていた。山形市のメインストリートである国道112号はこの町人地を貫いている。三十三観音の巡拝路は寺社地を結ぶが、城より扇状地の上流側半径2kmほどの半円形をなしている。

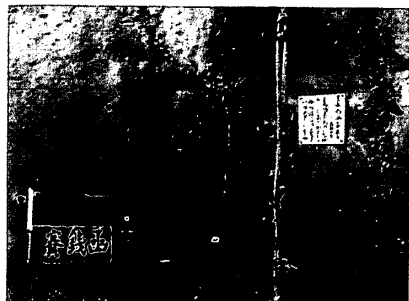


図7 岩部山三十三観音第33番

天保四(1833)年の大飢饉のとき、川樋村松林寺住職の金毛和尚が石工に西国三十三観音を刻ませて、開創された。毎年4月17日が祭りで、巡礼の衣装を整え、札所の御詠歌を唱えながら巡拝したという。



図9 山形県の最上、庄内、置賜霊場

巡拝順序は後藤博(1996)による。最上霊場は多くの温泉があり(武田小兵, 1931)、およそ札所番号順に4日(伊藤九左衛門, 1980)から8日(後藤博, 1996)でまわる

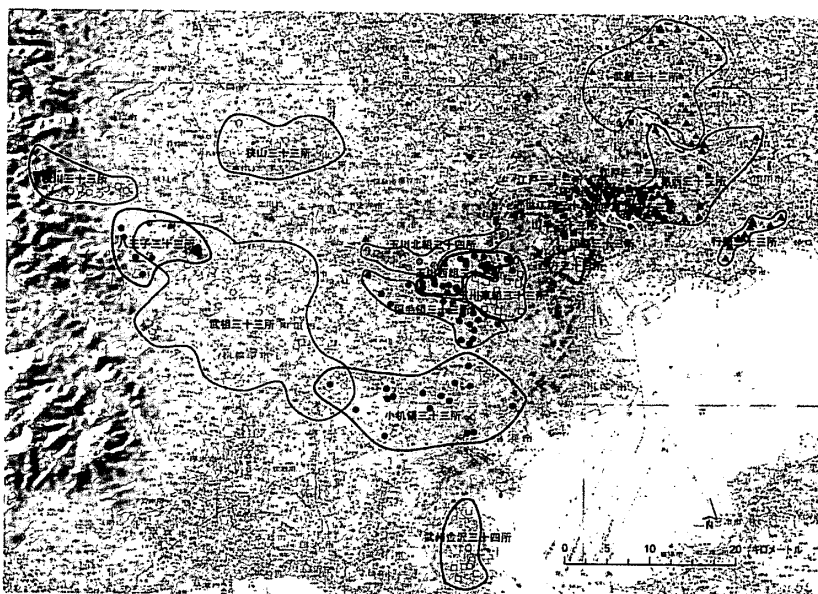


図11 江戸時代に開創された江戸の観音霊場



三観音の第13番札所であり、またここから2km上流の白髭橋までの間に、浅草七福神がある。隅田川に沿って低地帯にいくつかの観音がある。

第2番は浅草寺西方600mの合羽橋通りに面した清水寺である。さらに隅田川に沿って江戸通りを3km南に行くと、中央区日本橋小伝馬町の伝馬町牢、処刑場跡に、第5番大安楽寺がある。現在オフィスビルが立ち並ぶ人形町通りの0.7km南東の、中央区日本橋人形町に、第3番大観音がある。もと鎌倉にあった大きな菩薩頭部を本尊とし、境内に馬頭観音、地藏、韋駄天などもまつる。その東方1km余、隅田川対岸の墨田区両国に、第4番回向院がある。明暦大火、安政大地震、関東大地震の犠牲者をまつり、境内に馬頭観音の高い塔がたつ。

回向院から北西に3km、台東区上野公園に、第6番清水観音堂がある(図12)。多くの観音はこうした小高い地にある。港区三田の高台から北西の渋谷川に向けて下る魚藍坂に、第25番魚藍寺がある。付近の南北に伸びる台地上には寺院が多く、1km南の港区高輪に、第29番高野山東京別院がある。同寺は御府内八十八所の第1番札所でもある。

明治大正期にも、東京近辺には多数の観音霊場が開創された(図13)。とくに、日露戦争後、関東大震災後、さらに戦後に、開創のピークがある。

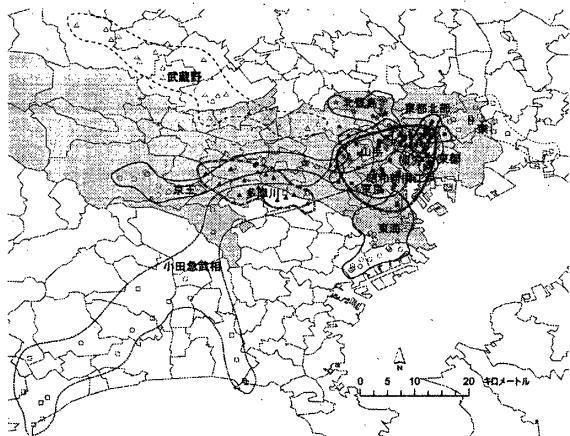


図13 明治以降に開創の東京近郊の観音霊場

昭和10(1935)年頃には京王三十三所、昭和11(1936)年には小田急武相三十三所のように、鉄道線に沿って開創される。

#### 御府内霊場

江戸時代には江戸近郊に、多くの大師霊場が開創された(図14)。観音霊場と異なり、江戸の東の

水田地帯に多い。明治・大正期には、江戸時代の旧霊場が組み直され、新たに開創された(図15)。

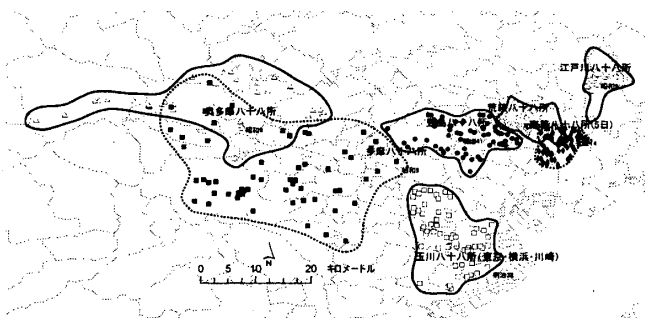


図15 明治以降に開創された大師霊場

江戸の代表的大師霊場が、御府内八十八所である。第1番は高野山東京別院である(図16)。周囲に10ヶ寺以上をみる。江戸にはこのほかにも、延宝三(1675)年開創の江戸六阿弥陀をはじめ、6つの六阿弥陀霊場がある(図17)。また安永四(1775)年開創の山手七福神をはじめ22の七福神霊場がある(図18)。さらに元禄四(1691)年開創の江戸最初六地藏をはじめ、8つの地藏霊場が開創された(図19)。

#### 印西霊場

江戸近郊の印西では、北総地方で初めて、享保六(1721)年三月より、大師霊場巡行が開始された。第1番を小倉村泉倉寺、第44番を笠神村南陽院、第66番を平賀村来福寺、第33番を師戸村広福寺とし、残りの霊場は地形、景観を考慮して割り当てられた。89札所のほか71の番外があり、みちのりは約120kmにおよぶ。文化(1804-18)年間に一時衰退するが、天保元年(1830)年に巡行が再開された。平成7年には4月1～9日にまわっている(榎本正三, 1996)。

印西大師はこの地域のさまざまな講のひとつである。印西市史編纂室(資料整理作業所)に保存された印西大師巡拝順路図(1991年改訂)によれば、巡拝路は手賀沼と印旛沼に挟まれた東西に延びた丘陵において、印西市を中心に東は本埜村や印旛村、西は白井町にわたっている。出発地点は一定ではないが、毎年春に同じ地域を周回する。巡拝地点は、ほとんどが丘陵の縁辺地域にあり、この地域のほとんどの寺院を連ねている(図20)。なお神社も丘陵の縁辺部に立地している。これらの寺院を巡ることは丘陵部を一巡することになり、巡拝路は本四国と類似している。

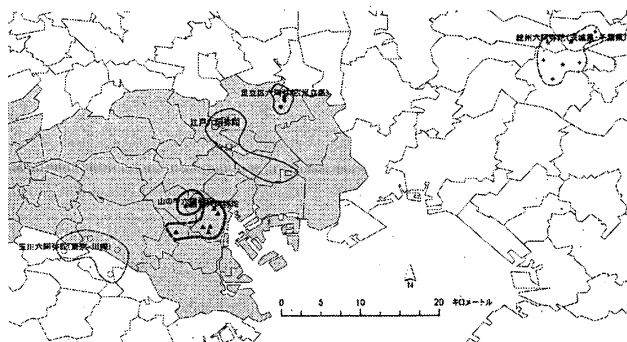


図17 東京付近の六阿弥陀霊場

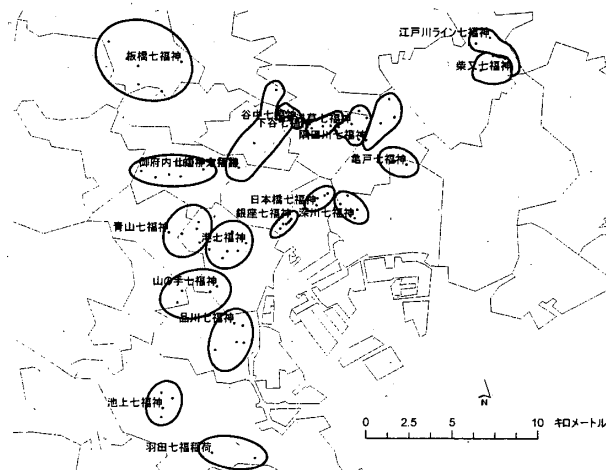


図18 東京都内の七福神霊場

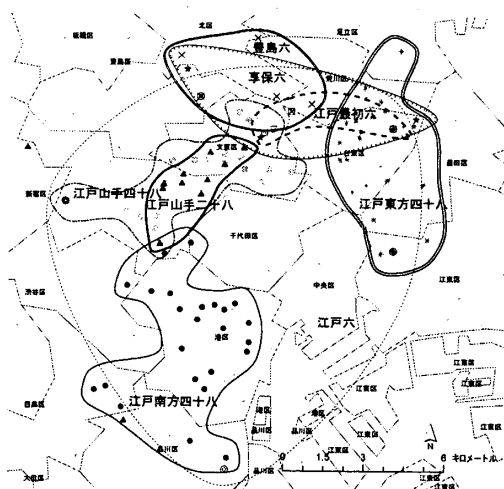


図19 東京都内の地藏霊場

### Ⅲ 巡拝路の設定

#### 1. ルート探索による巡拝路

霊場の各寺院あるいは堂宇などには札所番号が付されている。全体では周回するように配置されることが多い。ときに札所番号が不規則に配置され、巡拝路も示されぬにせよ、実際の巡拝には一定の順序や巡拝路が選ばれることになる。とくに、各霊場の札所寺院は、山地や丘陵の麓、あるいは

段丘や台地の縁辺部、また扇状地や沖積地においても自然堤防などの微高地など、傾斜変換点付近に位置するものが多い。そのため巡拝路は基本的に周囲の起伏を反映したものとなる。

また東西に約200kmの四国でも、四国遍路は江戸時代の真念の案内書では、およそ1400kmといわれ、巡拝路の総延長は長大なものとなる。全て巡るには約40日を要するため、巡拝路の意味は大きい。

巡拝路をゼンリンの電子地図帳Z5よりルート探索して求める(図21)。しかしルート探索は車を対象にしており、また徳島の第12番焼山寺、足摺岬の第38番金剛福寺、愛媛の第45番岩屋寺、第62番横峰寺など山間部にある札所では、路を往復するなど、不適切な部分がある。

秩父三十四ヶ所観音霊場で札所順にルート探索を行う(図22)。結果は、小道を通らず山地を大きく迂回し、また札所寺院まで同じ路を通っての出入りも多い。徒歩での巡拝ではより小道が利用されたはずで、また順行の路がたどられたと思われる。

#### 2. 札所群と巡拝の順序

札所配置が不規則であればもちろん、規則的であっても、巡拝の順序は札所番号にかかわらないことも多い。たとえば御府内霊場は13エリアとして案内されている(塚田芳雄・遊佐喜美男, 2000)(図23)。これは都市交通機関との組み合わせを前提としている。本来、札所の配置には地域的なまとまりが認められ、札所は札所群として捉えることができる。

この札所寺院の地域的なまとまりに注目し、札所の位置にクラスター分析を適用することにより、札所群を抽出し、さらに一般的な巡拝の順序を推定することを試みる。まず札所寺院の緯度・経度座標から、経線間隔を補正して、X-Y座標に変換する。さらに寺院間の距離をユークリッドの距離とし、距離の回帰的定義として最長距離法を用いて、札所群を抽出した。御府内八十八ヶ所霊場を例とすると、先に呈示されている13エリアにもとづいて予め3区分し、それぞれについてクラスター分析をした(図24)。

得られたデンドログラムから、大区分として4、中区分として8、小区分として16のクラスターを



抽出する。次に、大、中、小のクラスター順に、結合を決定する。さらに小クラスター中で個々の札所のつながりを決定し、中クラスター、大クラスター間も個別の札所で結ぶ。すなわちクラスターの結合過程を逆にたどって、類似の札所クラスターを次々に結び、全札所の巡拝順序を設定した。

設定された順路には、河川などの地形の影響が認められる。とりわけ台地の縁辺部や、また河川や細長い丘陵に沿って地域的なまとまりができる。目黒川、古川－渋谷川、神田川－妙正寺川、石神井川上流部、上野、亀戸、両国、深川近辺に札所がならぶ。そこは武蔵野台地を開析する小河川沿いや、荒川低地でも自然堤防などの微高地にあたる(図25)。

秩父霊場に同様の方法を適用すると、札所群として、横瀬川、秩父、浦山川、三峰口、赤平川に沿う地域などが示される。これは巡拝の順序としてのまとまりとほぼ対応する。

石川県の金沢西国観音霊場は、同様のクラスター分析をすると浅野川、卯辰山、段丘、犀川と寺町の台地に別れ、それにもとづくと、段丘や丘陵の縁辺部に沿った、巡拝路が設定される(図26)。

富山県の高岡三十三観音は、二上山、高岡市街、小矢部側に分かれる。高岡付近は南北に流れる千保川せんぼがわにより東西に分かれ、札所は東側の古城公園ののる微高地を巡っていることが示される。また札所はとくに微高地の西側に列状に集中している。農耕地が広がっていた時代には、用水とのかかわりから土地の微起伏に大きく影響したことが考えられる(図27)。

霊場を巡るには一度にではなく、むしろ週末などを利用して、数次に分けて巡拝することが多いと思われる。その際には札所群が一回の巡拝の単位となるため、ここでのクラスターはその札所群を示すものと考えられる。

### 3. 傾斜角を考慮した最短パスによる巡拝路

前述のように霊場の寺院は小高い位置、傾斜変換点付近にあることが多い。そのため実際の巡拝路は、起伏の影響を大きく受ける。こうした起伏を考慮した巡拝路を、ESRI社のArcView8.1を適用して、2点間の最短パスとして抽出する。

最短パス描画の手順は以下である。1)国土地理

院の数値地図50mメッシュ(標高)を、Inversion Distance Weighted法で内挿して、ラスタデータに変換し、さらに傾斜角を計算してクラス分けして、傾斜角コストラスタとする。2)傾斜は巡拝路としての困難を示すとして、偶数札所を出発点として、加重コスト距離を計算し、また方向ラスタより、前後の奇数札所を目的地として、最短パスを求める。こうして抽出された最短パスを、一般的な巡拝路とした(図28)。

御府内霊場の場合には、傾斜地を迂回する巡拝路が設定される。それは多くの場合、台地上を通ることになる。小河川の河谷内にくらべて、平坦で直線上のコースがとりやすいことによる。実際、中山道や甲州街道などのような古くからの主要道も台地上を通っている。また秩父霊場でも同様に求めた最短パスには、それに近い路が存在している。いずれにせよ得られた巡拝路には、それが谷筋や山麓に沿って大きく迂回する様子が示される。

この傾斜角を考慮した巡拝路は仮想のものではあるが、実際にはそれに近い道が存在し、そのためとくに近世以前の各霊場の巡拝路を推定する手がかりとなるものと考えられる。札所寺院が傾斜変換点付近に多いことから、巡拝路は坂道や屈曲を伴うことになるが、宗教的な意味のあるところを除けば、巡拝路はこうした傾斜の急なところを避けて選ばれたと考えられる。

## IV 巡拝路からみた霊場の検討

### 1. 巡拝の慣行と霊場の成立

復元された巡拝路の形態は、四国霊場のような環状のものばかりでなく、稲妻状や、出発点に戻らぬ線状のものもみられた。それらの形態は、霊場の性格の一端を示している。

本来寺院や神社には、それらを巡る習慣がある。一つの森のなかでも巡拝路は、単線型、広場型、奥宮型、多参道型、通り抜け型、回遊型、ネットワーク型、その他がある(上田 篤・菅沼孝之・蘭田 稔, 2003)。沖縄の御嶽にも森の中を回遊する通路がみられ、回遊は参拝の基本的な形態である。

古代には国司の任務の一つに、国内の神社を参拝して廻る聖地巡拝があった。各神社は地方豪族

の氏神的存在であり、巡拝順は国内豪族の力関係を反映した(山本尚幸編, 2003)。こうした国司の巡拝は、府中に総社を設けることにより消滅する。

神社ではまた、御輿が渡御して、神が神幸・巡幸し、ときに神送りがされる。神どうしも交流し、神無月には神は出雲へと移動する。一方、人は多く寺院を対象に巡拝してまわった。ただし送り大師や、遍路が同行二人とされるように、人だけでなく仏もまた移動した。すなわち大師霊場や観音霊場でも、巡ることは同時に仏を送ることでもあった。観音や大師は地方性の強い仏ゆえ、写しの形で各地に霊場開創が可能になったと考えられる。

古寺、旧跡めぐりとどまらず、三十三所、八十八所といった一定の構造が準備されている。神社にはさまざまな神徳、御利益があるにもかかわらず、それらは一般に巡拝されない。巡拝の要素は、山形でもみられるように、密教および修験道である。そして里山にまつられる観音である。

## 2. 巡拝の性格と巡拝路の形態

巡拝の意味は地域や霊場により異なる。会津三十三観音では、グループによる巡拝が基本で、地元の人々とくに女性が多く、子育てが終わる頃に始められ、楽しみとともに有益な地域の行事であった。最上三十三観音では、巡礼が個人の宗教的な功德あるいは善根だという考え方が基本にある。津軽三十三観音では地元の高齢女性がほとんどで、先祖や死者の供養のために行われ、家や家族が大きな意味をもつ(華園聡磨, 2000)。ただし比較的広域の地方霊場では、巡拝の意味に差異があっても、巡拝路はおおよそ簡単な形をしている。

江戸など都市の霊場は、札所全体は塊状だが、巡拝路は複雑である。これは市民が個人的に休暇の折りに巡拝するなど、地域ごとに札所群として存在するためと考えられる。

また都市近郊の霊場も、札所全体は塊状だが、巡拝路は複雑である。たとえば、利根川下流域には、四国の写し霊場が多数ある(小嶋博巳, 1996)。東葛飾郡沼南町、印旛郡白井町、鎌ヶ谷市、松戸市、柏市にわたる東葛印旛大師講では、幕末・明治以降に「送り大師」行事が取り入れられた。5月1～5日の「タネマキショウガツ」という農閑期に行われたが、農村の変化、娯楽の多様化、交通

量の増加、高年齢化、四国遍路の容易化などにより簡略化が進んでいる(小林 団, 2002)。個人として西国霊場、四国霊場に出かけるのと異なり、こうした写し霊場では、地元地域の集団的儀礼として巡拝が行われるために、生産、文化、信仰などで結びつく地域が網羅されるように考えられる。

## 3. 近年の巡拝の傾向

札所寺院は多くは観音をまつるが、境内には阿彌陀如来、不動明王、地藏、稲荷神などさまざまな神仏が祀られており、さらに境内には滝、岩壁、巨木などがあり、隣接して神社があることが多い。こうした札所は新たに開創された多くの霊場札所を兼ねており、札所の意味も多様化している。

個人にせよ集団にせよ、多数の人々が巡拝するようになる背景には、多様な要因がある。巡拝する人たちは、最上観音霊場では、健康、信心、家庭円満、路銀調達可、代替わりする思秋期の女人達という(渡辺信三, 2000)。少数の修行者による信仰に基づく巡拝から、生活にゆとりのある層における、観光、見聞、親睦、健康などへと意味が多様化した。

現在も新たな霊場が開創され、巡拝の意味も変化しつつある。たとえば1986年には、栃木県の八溝七福神巡りが開創された(1990.3.7朝日新聞)。開創にかかわった住職は、県のオリエンテーリング協会長も務めていたといわれ、総延長40km余りの巡拝は、健康と深くかかわる。さらに2003年には、秩父札所の昔の巡礼路に、食堂、土産物店、博物館を絡ませる「巡礼古道」が企画された(2003.1.11朝日新聞)。大規模霊場の巡拝は団体で観光バスを利用することが多いが、比較的手軽に、観光のみならず、文化に触れ、健康増進が求められている。

## 4. 高齢化社会と霊場

現代の巡拝の背景には、広義の観光があり、健康志向、ドライブ、地域探訪などがあり、単なる観光ではなく複合的な要因を含んでいる。また以前にくらべ、個人的な理由で巡拝することが多くなっている。

1989年にはぼけ封じ関東33観音霊場が正式に発会し(1990.6.3朝日新聞)、また1993年に東海白寿三十三観音霊場が結成された(1993.12.18朝日新聞)。



図12 昭和新選江戸三十三観音  
第6番清水観音堂

台東区上野公園内にあり、江戸期の札所から位置が変わらない。上野の山の最南端、不忍池を見おろす位置にあり、懸造りの舞台をもつ。



図16 御府内八十八ヶ所霊場  
第1番高野山東京別院

品川駅から桂坂を上った台地上に位置する。境内には斜めに参道が走り、幡を立てられる。八十八所の石仏が数段の高さのモニュメント状に立てられる。本堂内にはお大師様と右に観音様、左にお不動様がならぶ。

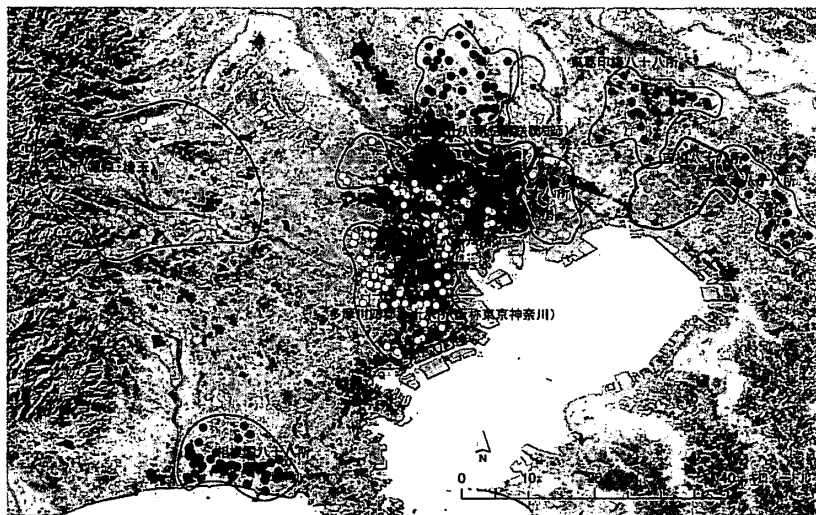


図14 江戸時代に開創された大師(八十八ヶ所)霊場

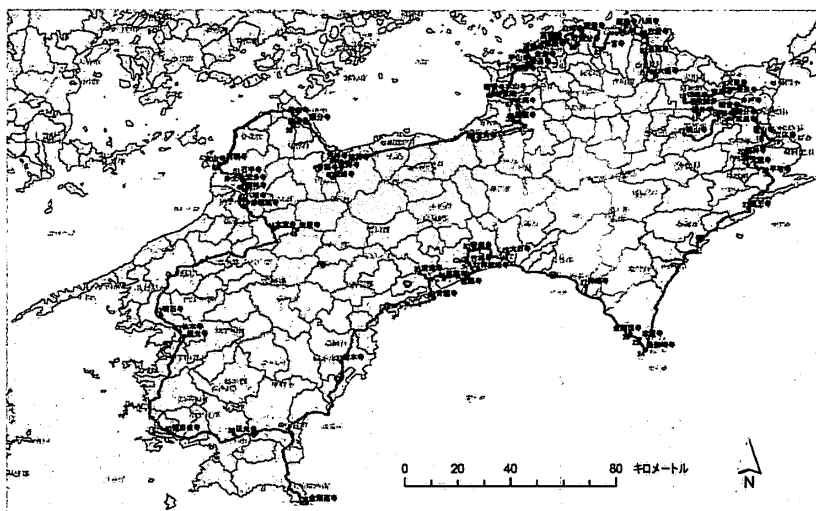


図21 四国八十八ヶ所霊場の巡拝路

ゼンリンの電子地図帳Z5よりルート探索すると、一般道優先の場合、総延長1288.1km、所要時間21時間29分のルートが示される。

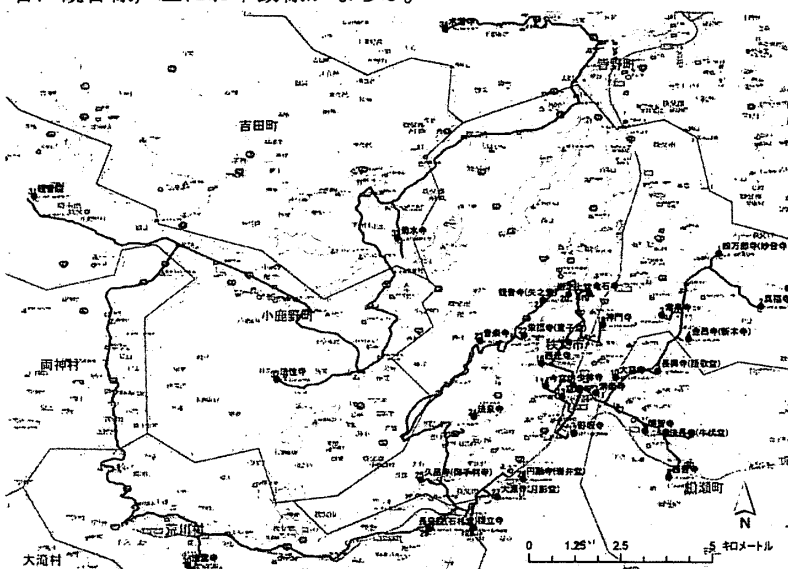


図22 秩父三十四観音霊場の巡拝路

途中路によく案内板がみられ、札所番号は規則的に配置され、わずかに第6番ト雲寺と第7番法長寺での逆打ちがいわれる程度である。この札所順のルート探索結果を示す。



図20 印西大師霊場

第89番浅間山 JR成田線木下駅付近の、手賀沼と利根川を結ぶ弁天川を見おろす小丘上に、八幡社と第89番札所がある。

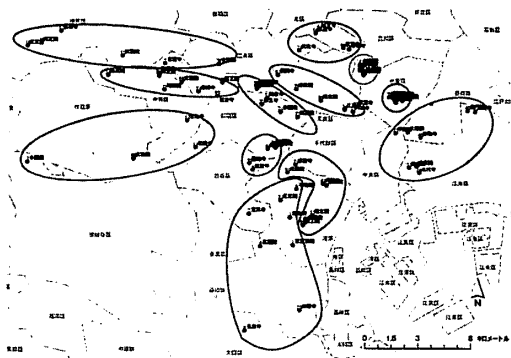


図23 方面別に設定された巡拝エリア

御府内霊場は、城南、三田・赤坂、谷中、浅草、江東、滝野川、文京、四谷、練馬、牛込、中野、城西、郊外の13エリアとして案内されている(塚田・遊佐, 2000)。

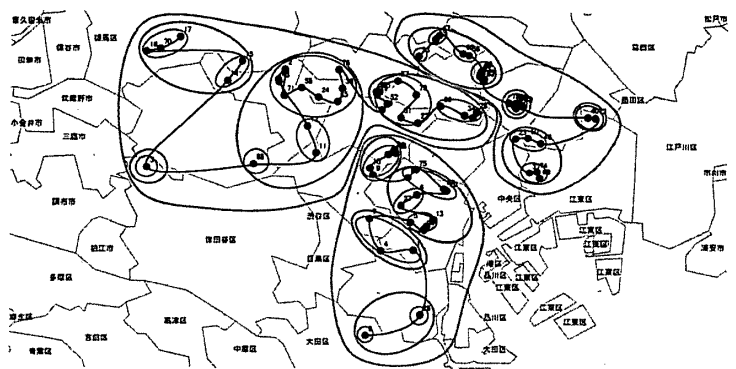


図24 クラスタ分析により抽出した  
御府内霊場の札所群

札所寺院はエリア別に分けられるように、近接する札所群がみつめられ、それらの位置にクラスター分析を適用することにより巡拝の順序が設定される。

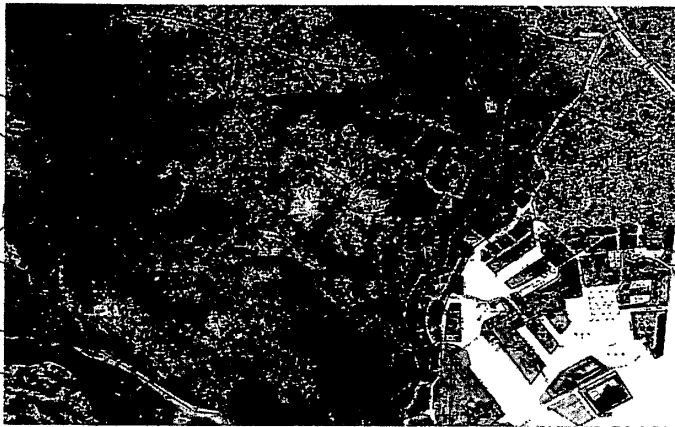


図25 クラスタ分析にもとづく御府内霊場の  
巡拝順序



図26 設定された金沢坂東観音札所の  
巡拝順序

石川県金沢市の金沢西国観音霊場は、市街地、金沢城周辺をめぐるものである。札所は東山の山麓や浅野川と犀川の間の河岸段丘の縁辺に、とくに集中している。札所番号は比較的連続するところもあるが、そのままたどることはできない。

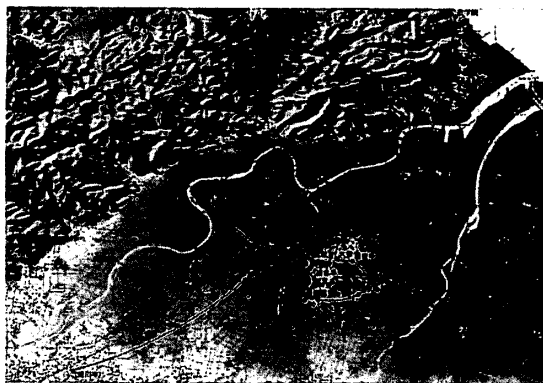


図27 設定された高岡三十三  
観音霊場の巡拝路

富山県の高岡三十三観音には、札所番号とは別に、4コースが設定されている。同様のクラスター分析を行うと、海側、二上山、高岡市街、小矢部側に分かれる。

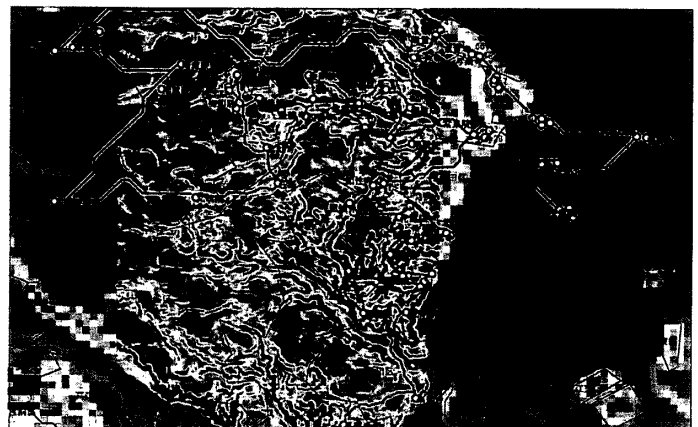


図28 傾斜角分布と最短パスで示される  
御府内霊場の巡拝路

赤色が急傾斜地を示す。江戸の御府内霊場を例にして、巡拝路は傾斜地を避けたと仮定し、傾斜角をコストとする最短パスから巡拝路を復元。

これらの霊場の開創には、老人の健康やぼけ防止がうたわれている。

さらにその背景には石材業者や仏像専門店がかかわっており、観音像や霊場グッズを卸し、霊場のノウハウを提供しているという。全国的な霊場開創の増加には、1984年の弘法大師一千百五十年法要が一つの契機となるが、一方で増加した水子地蔵にかわる仏像需要が業者より求められたこと、高齢化が社会問題化したことなどが関わってきた。

## V おわりに

本論では、北陸、南東北、南関東における地方霊場を例に、巡拝路を中心に調査した。多くの霊場では開創当初からの札所の異動も大きく、巡拝路も明示されない。それらの霊場についてクラスター分析を援用して巡拝順序を設定し、GISを利用して巡拝路を復元した。さらに近年開創された霊場などから、巡拝路の意味の変容について検討した。その結果得られた主な成果は、以下のとおりである。

- 1) 北陸では江戸時代後期に、越前を中心に多くの観音霊場などが開創された。それらの巡拝路は、起点と終点が離れたものも多い。
- 2) 南東北では戦国時代以降、農村や都市に多数の霊場が開創された。修験の影響が強く、さまざまな種類の霊場が重層している。
- 3) 東京では多数の都市霊場が開創されたが、札所群を巡拝する傾向がある。一方東京近郊では、地域内をくまなく巡拝する路がとられた。
- 4) 地図ソフトなどにより効率的な巡拝路が設定される。ただし車を対象としており、巡拝路としては不自然なことも多い。
- 5) 霊場内に存在する札所群が、クラスター分析により抽出される。さらに近隣の札所を結びつけると、適切な巡拝順序が知られる。
- 6) 上り下りを避けるよう、傾斜角を考慮した最短パスから、巡拝路を復元する。それらは自然に作られた道に近似すると思われる。
- 7) 巡拝は古来より、神社などで行われた年中行事の一つである。次第に札所めぐりの一定の形式が普及するようになった。
- 8) 巡拝は個人的に行うか、あるいは地域集団で行われる。前者であれば札所群を適宜訪れ、

後者であれば地域内をくまなく巡る。

- 9) 近年では、信仰や供養のほか、観光や親睦の比重が大きい。さらに健康や文化などと絡めた巡拝が、多くみられる。
- 10) 高齢化社会において、現世利益と結びつく霊場が求められている。その開創には、関連業者からの働きかけが大きい。

一般に霊場の札所は、33や88の聖数にみあうよう選定される。開創の古い霊場は、盆地や島に位置するものが多い。こうした霊場は、環状の巡拝路の形態のものが多い。それは地域内の中心地より出発・帰還するのが好都合であり、かつ地形もそれに適していたことによると思われる。

しかし霊場が各地に増加すると、巡拝路はさまざまな形態をとるようになった。それは信仰の対象よりも巡拝する側の事情による。都市部においては、都市住民が個人的に折々に巡拝した。また農村地域では地縁集団が共同体維持のため、地域をくまなく巡った。それぞれの生活圏と強く結びつく一方、不規則な起伏の地域に展開したため、巡拝路も不規則な形態のものとなった。

近世の札所も、近辺には温泉が多く、さらに札所より名所旧跡を訪ねる巡拝も指摘されている。近年開創の霊場では高齢者の心身の健康などが喧伝されるが、設立の経緯によれば仏像の前における現世利益祈願が主とも考えられる。さらに車や鉄道の利用を前提に、旧来にはない形態の巡拝路が現れるようになった。

近年では札所近辺は詳しく案内されても、途中経路は簡略化され、巡拝路は明示されないことも多い。個人的な巡礼者が、個々に巡拝路を創出することは、巡拝を主体的・能動的に意義付けるものかもしれない。しかし、古い霊場では道に里程を記した道標が立ち、巡拝者も接待を受けつつ道を尋ねたであろうし、一定の巡拝路が存在したように思われる。その他の道にも通る位置があり、日々通うにも一定の経路が存在する。かつての札所が変わるとともに、巡拝の意味も変容したと考えられるが、霊場開創当初の巡拝路が復元されることにより、霊場や地域の空間的秩序が明らかになるものと考えられる。

## 謝 辞

本研究を進めるにあたり、北陸、東北、首都圏などで行った調査の際には、現地の方々から多大なご配慮と多くの示唆をいただきました。記して感謝申し上げます。

## 文 献

- 阿部西喜夫(1983)：『長岡三十三観音札所御詠歌』石川寺，44折。
- 伊藤九左エ門(1980)：『秩父坂東最上巡礼の旅』私家版，86p。
- 伊藤妙子(2001)：『新庄地廻り三十三観音・七所明神』私家版，95p。
- 上田 篤・菅沼孝之・園田 稔(2003)：『身近な森の歩き方ー鎮守の森探訪ガイド』文英堂，247p。
- 榎原雅治(1996)：若狭三十三所と一宮ー中世後期若狭の寺院と荘園公領総社ー。真野俊和編『巡礼の構造と地方巡礼』雄山閣出版，194-229，(初出：史学雑誌，99(1)，1990)。
- 榎本正三(1996)：神仏への祈りと願い。印西町史編さん委員会編『印西町史民俗編』印西町，379-642。
- 大路直哉(2001)：『日本巡礼ガイドブック』淡交社，270p。
- 小形利吉(1989)：『最上四十八地蔵』郁文堂書店，348p。
- 奥村幸雄(1997)：『二人三脚置賜霊場めぐり』私家版，99p。
- 小嶋博巳(1996)：利根川下流域の新四国巡礼ーいわゆる地方巡礼の理解に向けてー。真野俊和編『巡礼の構造と地方巡礼』雄山閣出版，274-311，(初出：成城文芸，113/114，1985)。
- 後藤 博(1996)：『出羽百観音ーやまがた巡礼ガイドブッケー』みちのく書房，244p。
- 小林 団(2002)：東葛印旛大師講の変容ー千葉県北部の新四国霊場に見られる事例としてー。東洋大学大学院紀要，38，325-335。
- 佐藤清敏(1983)：『山形三十三観音霊場巡礼道路案内略図』私家版，21p。
- 佐藤清敏(1984)：『山形七福神参り 道路案内略図』私家版，33p。
- 宗教グラフ情報社編(1992)：『出羽路十三佛霊場巡り』出羽路十三佛霊場会，71p。
- 大宝輪閣編(1997)：『全国霊場巡拝事典』大宝輪閣，478p。
- 高橋由子(1995)：『村山四十八地蔵』私家版，199p。
- 田上善夫(2003a)：北陸および広域における霊場と風祭の分布とのかかわり。富山大学教育学部紀要，57，59-74。
- 田上善夫(2003b)：地方霊場の立地環境と展開について。富山大学教育学部研究論集，6，35-48。
- 武田小平(1931)：『最上三十三観音順礼始 由来物語』明山堂，132p。
- 田原 久編(1980)：『日本祭礼地図Ⅴ 付録・索引編』国土地理協会，398p。
- 塚田芳雄(1989)：『江戸・東京札所事典』下町タイムス，215p。
- 塚田芳雄・遊佐喜美男(2000)：『エリア別御府内八十八ヶ所霊場案内』下町タイムス，238p。
- 寺尾 満(1998)：『上山三十三観音』私家版，107p。
- 出羽路十三仏霊場会(1992)：『出羽路十三佛霊場巡り』71p。
- 富永博次(1982)：『若狭観音霊場案内記』若狭観音霊場会，68p。
- 沼沢 明(1978)：新莊地廻三十三観世音巡礼記。最上地域史，1，77-101。
- 沼沢 明(1988)：新莊地廻二十四箇所地蔵巡礼について。最上地域史，11，33-38。
- 華園聡磨(2000)：東北の霊場 その「まいり」の形と心ー観音札所巡礼の「納札」の分析を中心としてー。東北文化研究室紀要，41，1-18。
- 東根七観音霊場会(1992)：『東根七観音霊場巡り』東根七観音奉賛会，8p。
- 佛教文化通信編集部(1987)：『北国八十八ヶ所霊場めぐり(第一部)』佛教文化振興会，95p。
- 山田雄造(1996)：寺社参詣の普及。福井県編『福井県史 通史編4 近世Ⅱ』福井県，685-695。
- 山本尚幸編(2003)：貴船神社 一の宮と総社。週刊神社紀行，39，p.33。
- 渡辺信三(2000)：祈りの旅・最上巡礼。研究資料集，22，78-85。